

とにかく農業をやりたかった サラリーマンから転身した男たち

愛媛県松野町 トマト養液施設栽培



竹葉さん

東さん

井上さん



中セキの養液栽培システムでトマトの栽培に励む3人。

「農業が好きだ」
故郷で耕す就農者たち

四万十川支流の広見川が清冽な流れを見せ、なだらかな山々が周りを囲む愛媛県松野町。桃、茶、柚子の栽培が盛んなこの中山間地で竹葉さん、東さん、井上さんの三人はサラリーマンから農業者になり、ともにトマトのハウス栽培を手掛けています。熊本や宮崎などの産地を視察し、互いに技術を磨いて地域の新たな担い手として周囲の期待を集めている。

三人は「農業が好きだからやってきたい」という思いを抱え故郷へリタ

竹葉 徳男さん(54歳)
東 高広さん(37歳)
井上 優二さん(28歳)

ーし、サラリーマン生活とは異なる世界へ飛び込んでトマト栽培を始めた。その当時、松野町農林公社は先進的な農業に取り組んでゆく人材を育てようとトマトのハウス施設に中セキの養液栽培システムを導入。三人が農林公社で二年間研修した際、中セキのシステムで技術を身につけた。

三人はそれぞれ自宅近くに中セキの養液栽培施設を設置し、トマトと向き合う毎日を送る。独立する際は、周囲のバックアップもあって大きな不安はなかった。農業への一途な気持ちが、就農への道を拓いたのだ。

とにかく農業をやりたかった。美味しいものを作りたい。サラリーマンを辞めて新たな道に進んだ三人。

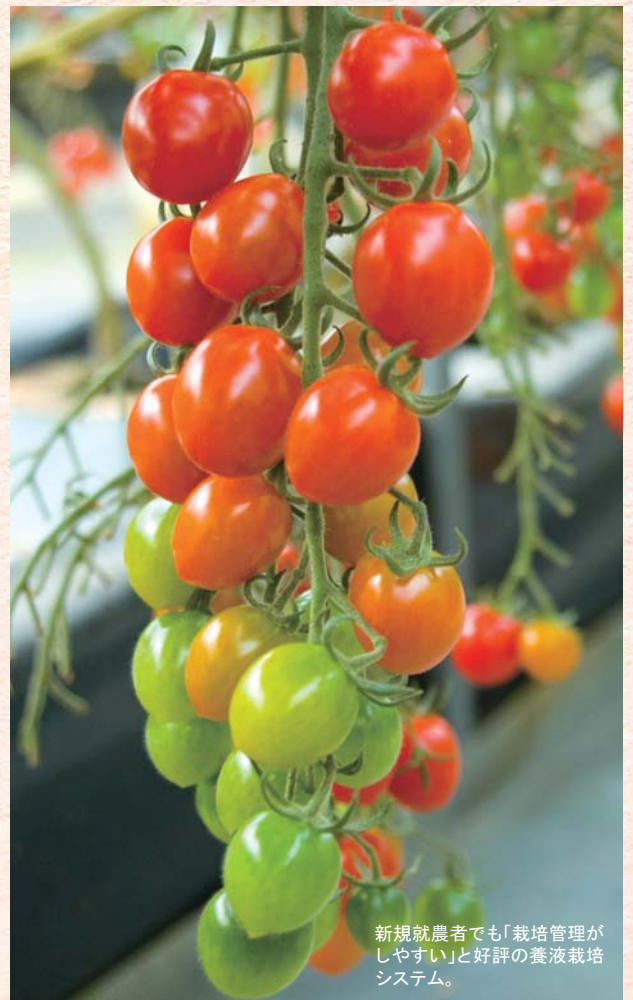
さまざまな経験を積んで いよいよ農の道へ

竹葉さんは就農する前、「生き物とかわり合える仕事なら何でもやってみたい」と考え、さまざまな仕事に携わって経験を積んできた。地元の高校を卒業した後、愛知県にある養鶏場や養豚

場で飼育管理をし、青果物のバイヤーとしても働いて、市場流通の仕組みを实地で学んだ。もともと好奇心が旺盛で関心を持ったことはほとんどなかった竹葉さん。「故郷に戻ると決めたとき、さまざまな職を通して身につけたことを生かしながら農業をやろうと思いついた」と話す。



夕方収穫、翌朝には直売する道の駅とスーパーに届ける。
「直売だからこそ新鮮なトマトを届けることができます」と竹葉さん。



新規就農者でも「栽培管理がしやすい」と好評の養液栽培システム。

実家は兼業農家で、十二年前に戻ってからすぐに実家で手掛けていた米とキュウリの栽培を始め、八年前に農林公社の研修生になった。「やりたいことは、身近でできることからすぐに始める」という生き方が、存分に発揮されている。

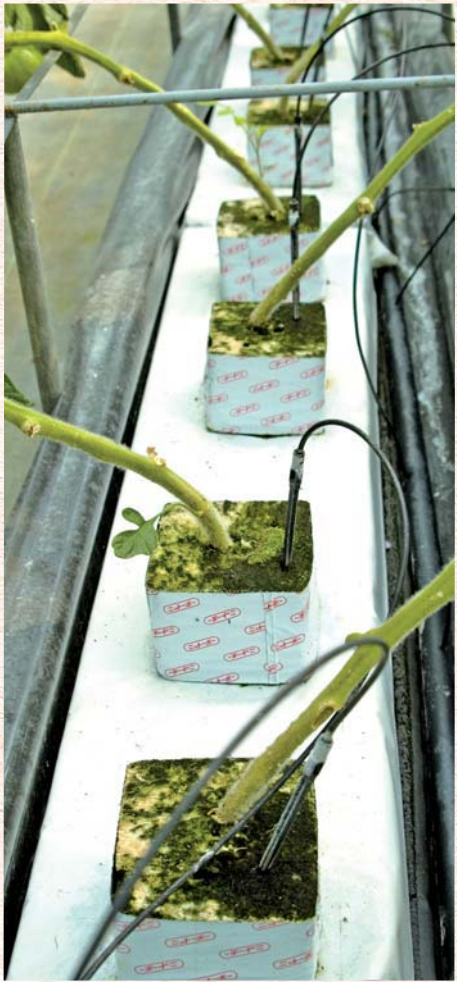
竹葉さんは六年前、自宅に隣接する農地にトマトの養液栽培システム（六百六十平方メートル）を導入。研修した時と同じシステムで栽培するため、技術面にとまどいはなかった。初年度の収量は、大玉とミニトマト合わせて反収およそ十七ト、二反あたりの売上げは七百五十万円ほどだった。

「養液栽培は土を使わず、思い通りに水と養分を与えることができるので作物の管理がしやすい。さらに廃液を出

さずに循環させ、環境にも配慮したシステムだからいい」と竹葉さん。「栽培技術は自分で実際にやってみて身につくもの。作業は一人で大変だし病害も気になるが、もっと収量を増やしてみんなに喜ばれる美味しいトマトを作りたい」と夢を膨らませる。四月末、ハウスでは大玉とミニトマトが熟し始めた。丹精して育てたトマトの収穫作業は七月末まで続く。

睡眠時間を削っても 育てることは楽しい

「三十歳くらいまでに農業に携わりたい」との思いを実現した東さんは、六年前に就農。以前は年をとったら農業を始めようと考え、妻にも話していた。



養液システムで効率的に栽培している。

しかし「すぐにでも始めたい」と気持ちが高まり、それまで勤めていた大阪の会社を退職、農業の世界へ踏み込んだ。「自分で作ったものを家族みんなで食べ、さらにはいい品質の作物を作ってお客さんに喜んでもらえたらうれしい」とトマトづくりへの意気込みはいっそう高まっている。

業に没頭するくらい「やりがいを感じている」。

就農したことで日々の充足感が増し、子どもを保育園に送り迎えてできるようにもなった。

東さんは言う。「初期投資は必要だが、生活はだんだん楽になっている。農業を始めてから家族との団らんも増えた。会社勤めのころより幸せです」。

就農のきっかけは 体が覚えていた農業体験

井上さんは高校を卒業した後、愛媛県今治市で製造業の会社に勤め、七年

前にトマトの養液栽培に着手した。兼業農家の家庭に育ち、子どものころから米づくりを手伝ってきた。農家を目指した背景には、この幼少時からの体験があった。

「きっかけがあったら農業をやろうと考えていました。知人を介して、農林公社の研修生募集を知り、いい機会だと考えて思いきって研修生になりました」と就農にいたった経緯を語る。計千平方メートルのハウスで大玉のトマトを栽培。就農以来、年一作の栽培体系だったが、今年から経営基盤を固めるために年二作に取り組んでいる。

井上さんは「こまめに病害対策を講



竹葉さんのハウスの外観。面積は660㎡。周囲は山々が迫り、近くに広見川が流れている。

じて、できるだけ収量を確保したいです」と語り、「養液栽培システムは、培地がロックウールだから水管理がしやすいですね。安心して栽培しています」と説明する。

「収穫するときの喜びは何物にも替え難く、それまでの苦労が実を結んだと感じる。まずは技術を高めて安定した収量を得ることが第一の目標です」と力強く語る。

「美味しかった」 お客様の声が原動力に

竹葉さんと東さんのトマトは地元の道の駅やスーパーなどで直売。井上さんは直売に加えてJAに出荷している。「出荷前日の夕方にできるだけ熟した状態のものを収穫し、翌朝には道の駅やスーパーに届ける。新鮮だからお客さんに喜ばれているよ」と竹葉さん。「色合いや形など思い通りに結実したトマトは完売する。逆にトマトの姿を目見えていまひとつと感じたものは、たいてい売れ残ってしまう。完売するものをできる限り多く作っていききたいですね」と東さん。

顧客から届く「美味しかった」「いつも買っているよ」との声を励みに栽培に精を出す三人。トマトづくりの先には、支えてくれるお客さんの笑顔がある。